



**Data**

監督: シルヴィア・チャン  
 脚本: シルヴィア・チャン / ヨウ・シャオイン  
 出演: シルヴィア・チャン / ティエン・チュアンチュアン / ラン・ユエティン / ウー・イエ  
 シュー / ソン・ニンフォン / レネ・リウ

## 👁️👁️ みどころ

台湾生まれのアジアを代表する女優で、監督でもあるシルヴィア・チャン(張艾嘉)の最新作は、心温まる3世代の女たちの物語。そのメインは“お墓は誰のものか?”を巡る闘争(?)だが、そこでは誰が本妻?ひょっとして重婚罪?という、現代中国の「都市」vs「農村」を巡る社会問題が噴出するので、それをしっかり考えたい。

また、邦題はいかにもわかりにくいのが、原題の『相愛相親』の意味を、定年間近の夫婦と歌手を目指す若者とその恋人という、第2、第3のテーマを含めて、しっかり考えたい。

スタジオ内で「カメラを止めて!」と叫んでいる時が紛争のピークだったが、その後は第1世代、第2世代双方の女たちの“英知”によって問題はしかるべき解決へ。シルヴィア・チャン監督が描く3つの“相愛相親”の姿を、温かく見守りたい。



### ■原題と邦題の意味をしっかりと考えよう! ■

本作の脚本を共同で書いて監督をし、その上、主演したのが、1953年生まれ台湾出身の女優、シルヴィア・チャン(張艾嘉)。中国映画では、『ジャスミンの花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』(04年)で茉莉、花という3世代の女性役をチャン・ツイイー(章子怡)が1人で熱演していた(『シネマ 17』192頁)が、本作ではシルヴィア・チャン扮する定年間近の女教師ユエ・フィイン(岳慧英)役が、邦題で言う“娘”で、その母親は、冒頭に死ぬシーンで登場するだけ。つまり、本作の邦題で言う“妻”とは、かな

り昔に亡くなったフィインの父親の最初の妻、ツォン（岳曾）のことで。

そこで日本人なら誰でも疑問に思うのは、最初の妻ツォンがいるのに、なぜフィインの父親には2番目の妻（フィインの母親）がいるの？ということだ。ひょっとして、どちらか一方の妻は正規の妻ではなく不倫・・・？いやいや、本作はそんなテーマの映画ではないはずだ。しかし、本作の邦題は『妻の愛、娘の時』だが、原題は『相愛相親』。これは、「愛し合い、親しみ合う」という意味だが、それだけでは日本人には何のことかわからない。そこで邦題のようにしたわけだが、それでもわかったような、わからないような・・・？

しかし、女優としてだけではなく、監督としても大いなる才能を発揮し続けているシルヴィア・チャンの手にかかれば、今の時代なればこそ発表したこんな中国映画の素晴らしさがくっきりと！母親の死を夫のイン・シアオピン（ティエン・チュアンチュアン）（田壮壮）、娘のウェイウェイ（ラン・ユエティン）（郎月婷）と共に看取ったフィインは、母親の遺骨を父親と同じ墓に入れるため、父親の故郷に戻り、そこにある父親のお墓を自宅のそばに移そうと考え、家族3人、車で赴くことに。

私は数年前から中国語の勉強を頑張っているから、本作の原題と邦題の意味がよくわかるし、セリフもかなり聞き取れるようになってきた。本作については、あなたもその内容の素晴らしさを理解するため、原題と邦題の意味をしっかりと考えよう！

## ■□■お墓は誰のもの？そんなテーマにテレビ局が殺到！■□■

私は都市問題を弁護士としてのライフワークにしているが、“土地バブル”が頂点に達しようとしていた1987年11月、NHKは『NHK特集緊急リポート 世界の中の日本土地はだれのものか』と題する緊急リポートを発表し、“空前絶後”の反響を呼んだ。ここでは、第1部—地価高騰が日本を変え、第2部—国際比較・これが地価対策だ、第3部—土地問題をどう解決するか、の統一テーマが「土地はだれのものか」だったが、本作では故郷にある父親のお墓を巡って「お墓は誰のものか？」というテーマでTV局が殺到するので、それに注目！

本作には、『709の人たち—不屈の中国人権派弁護士と支援者たち』（17年）（『シネマ41』未掲載）の日本語訳をすると共に、その日本での上映を企画・実現した阿古智子（東大准教授）の「今なお中国に横たわる『町』と『村』の距離」と題するコラムがあるので、これは必読！今の中国の問題点を読み解くためには、“町（都市）”に住むフィインと、“村（農村）”に住むツォンたちの“違い”や“格差”をしっかりと理解する必要がある。また、日本では“火葬”がすべてだが、中国の農村部では今も“土葬”がある。しかし、ツォンがしっかりと守る、亡き夫のお墓を巡る攻防戦は？

本作にみるウェイウェイが山口百恵そっくりなのは驚いたが、彼女が働いているTV局は、彼女の母親フィインがそんな問題で悩んでいると聞き、興味津々。「お墓はだれのものか」というテーマが、日本のバブル期の「土地はだれのものか」と同じような“空前絶

後”の反響を呼ぶとは考えられないが、お墓を死守しようとする最初の妻のツオンと、そこから父親の遺体を持ち帰ろうとする後の妻の娘であるフィンが“肉弾相撃つ”女の戦いを展開すれば、珍しいもの好きなバラエティ番組愛好者の視聴率がアップすること間違いなし！そう読んだTV局がクルーを派遣し、ツオンへのインタビューを試みると、それに反発したツオンはレポーターの耳をつまみ、実力行使で撃退しようとしたから、こりゃ絶好の映像に。さらに、カネを払って人夫を雇ったのだから、何が何でも父親の遺体を運び去ろうとするフィンに対して、ツオンを応援する地元住民が大量に駆けつけ、お墓を巡る大乱闘(?)になったから、これも絶好の映像に。結局、遺体の運び出しはできなかったから、この第1ラウンドは「ツオンの勝ち！」となったが、さてフィンの巻き返しは？その作戦は？

## ■□■ひょっとして重婚罪？その日中比較は？■□■

中国の刑法にも、日本と同じように「重婚罪」があるらしい。しかし、日本では「重婚罪(184条)」の主体は「配偶者のある者」であり、「配偶者との関係(前婚)は、事実上の婚姻関係では足りず、法律(戸籍)上正規の届出をした民法上の配偶者をもつ法律上の婚姻関係を指す。前婚、後婚とも法律上正規の婚姻であることを要する(通説。)」とされている。そのため、刑法のコンメンタールでは「その場合、実際上重ねて婚姻することは困難であるため、本条の適用例は非常に少ない。」と解説されている。

他方、前記、阿古コラムによれば、「ちなみに、中国においても重婚は犯罪であり、事務手続きの過誤や虚偽の申告などにより二重に婚姻の手続きが受理されている場合や、既に結婚登記をした配偶者がいるにもかかわらず、他の相手と同居するなど事実上の婚姻生活を送っている場合などがこれにあたる。」と解説されている。つまり、「日本の民法では、重婚は法律婚が重複して成立する場合に限られるが、中国の刑法や婚姻法は、事実婚(内縁)の重複についても重婚とみなしている。」わけだ。もっとも中国でも、「ただ、裁判所が重婚罪を適用するのは、当事者が訴えた場合に限られる。」らしい。

すると、フィンの父親の場合、最初の妻ツオンを故郷に置いたまま町に出て行き、ツオンへの仕送りをし続けつつもフィンの母親と結婚したのだから、それは重婚罪・・・？いやいや、そんなバカな・・・？

## ■□■本妻は誰？その決め手は「結婚証明書」だが・・・■□■

その点についての正確な法律解釈はともかく、本作導入部ではフィンの亡き母は、ツオンや地元の人たちからは“第二夫人”とか“妾”とかと呼ばれていたからフィンのみならず、私たちもビックリ。すると、亡き夫の正式の妻はツオン？それともフィンの亡き母親？それを証明するためには「結婚証明書」がいるそうだが、それは民政局の仕事なの？それとも公文書館の仕事なの？最初の妻ツオンが夫と連名で“婚姻届”を出したのは

1953年のことらしいが、フィインの母親とその夫との婚姻届はいつ、どこに出されたの？

フィインは夫のシアオピンと共に、かつてこの父親の故郷に建っていたはずの民政局の出張所を訪れたが、そこは都市開発のため、既になくなっていて。そのため、本作中盤ではフィインが民政局や公文書館を訪れて、亡き母親とその夫との“結婚証明書”を再三請求したにもかかわらず、「1978年以降の資料しかない」と言って断られたり、証明するためにはさらに「職場の証明が必要だ」と言われたり、中国の“お役所仕事ぶり”は日本以上だ。就業時間を1分でも過ぎれば一切仕事はしない姿もいかなもの・・・？

ちなみに、本作ではツォンが住んでいる村の具体的な地名は明らかにされないが、プレスシートによると、後述するウェイウェイの彼氏、アダー（ソン・ニンフォン）（宋寧峰）が『『西安から北京に向かう途中で立ち寄った都市』』と言っていることから、鄭州、洛陽のような、大都会ではない地方の小都市が舞台と考えられる」そうだ。村の入口の、大きく「貞節」と書かれた看板が目立つこの村で、“結婚証明書”がなかなかもらえない状況の中、フィインのイライラは頂点に達していったが・・・。

## ■□■若者たちの恋模様は？職業が歌手では■□■

日本人が知っている中国人歌手で最も有名なのはテレサ・テン（鄧麗君）だが、逆に言えば、日本人は彼女しか知らず、中国におけるロック・ミュージックやロック歌手を夢見て努力している中国の若者たちを全く知らないのが実情だ。私は中国人の友人の情報で少しはそんな世界を知っているが、本作でウェイウェイの恋人として登場するロック歌手、アダーが夜毎バーで繰り広げているバンドの活動風景を見れば、その様子がよくわかる。将来のスターを夢見て自分で作詞・作曲をし、仲間と組んだバンドでそれを演奏し、日々の稼ぎを得ながらファンを獲得していく。そんな若者たちの地道な作業はアメリカでも日本でも中国でも同じだし、成功する確率のごくわずかしかないという厳しい現実も同じだ。

前述したように、アダーが今この地で歌手活動をしているのは、北京に行く途中、この小都会でウェイウェイと知り合ったため。スクリーン上で見る限り、2人の恋模様の進展も万国共通のようだが、この2人が既に“男女の一線”を越えているのかがどうかハッキリしないところが中国映画の面白さだ。ウェイウェイはアダーとの結婚を望んでいるようだが、アダーが彼女と結婚してこの地に留まることは考えられないから、そこをどう考えればいいのか？またウェイウェイは、定年を間近に控えている厳格な教師である母親のフィインから、生活や収入の不安定な歌手志望の若者、アダーを結婚相手とするのに反対されることがわかっているため、それを口にすることができないままだったが、そんな2人の恋模様の展開は？

本作では、フィインのお墓の争奪戦を巡る一徹さと、娘ウェイウェイの教育に対する厳格さが目立っているが、逆にその分、フィインの夫であり、ウェイウェイの父親であるシ

アオピンの物分りの良さや優しさが目立っている。お墓を巡るトラブルがTV局を巻き込む中でどんどんエスカレートしていく上に、娘のウェイウェイが「家を出ていく！」という事態にまで発展し、フィインのイライラはますます増大していったが、そんな中、シアオピンのフィインに対する“相愛相親”は・・・？

## ■□■ 2世代の女がスタジオで激突！「カメラを止めて！」 ■□■

両親の家を出て行ったウェイウェイは、母親フィインと（義理の）祖母ツォンとのお墓を巡る争いに困惑しながらも、優しくツォンと接していた。最初はウェイウェイに対してまったく口を利かず、トコトン“意地悪ばあさん”のように見えたツォンも、一緒に寝泊まりしてみれば、普通の優しいおばあさん。亡き夫からの仕送りと共に送られてくる手紙を大切にしていたから、ツォンにしてみれば、自分の夫が都会で別の女と結婚し、子供まで作っているとは想像できなかったようだ。また、ウェイウェイが読み解くところでは、夫からツォンに宛てられた手紙は単なる近況報告で、“愛情の発露”とは思えなかったが、ツォンにとって、それは宝物だったらしい。

TV局のアホバカバラエティ番組志向は、日本でも中国でも同じらしい。そのため、高視聴率を取れる「お墓は誰のものか？」というテーマの取材はエスカレートし、今日はついにツォンがスタジオに登場する日。なぜツォンがわざわざスタジオまで行って、生出演する気になったのかについて、彼女の口からは多くは語られないが、ずっとツォンの側で様子を見ていたウェイウェイにはそれがよくわかるようだ。

他方、フィインはTV局がそんな取材をしていることを極力無視していたが、たまたまツォンが生出演する日にウェイウェイに荷物を届けにいくと、言葉巧みに誘導されてスタジオに入ってしまったフィインに対してカメラが向けられたから、アレレ……。現在、わずか300万円の製作費で作った上田慎一郎監督のゾンビ映画(?)『カメラを止めるな!』(17年)が想定外の大ヒット中だが、ここでフィインが叫んだのはそのタイトルとは正反対の「カメラを止めて！」しかし、商業主義を徹底させ、視聴者が喜ぶなら何でもあり(?)という今のTV局が、フィインのそんな言葉にひるむはずはない。そこで腹をキメたフィインは、カメラに向かって堂々と“自説”を主張したが、さてその内容は・・・？ここらあたりのシルヴィア・チャン監督の演出力と、女優としての演技力はさすがに大したもの。その圧巻の迫力に注目！

## ■□■ “3つの結末”にみる「相愛相親」をどう考える？ ■□■

TV局のスタジオでの第1世代(ツォン)と第2世代(フィイン)との激突の後、「お墓は誰のものか？」を巡る大騒動は、一時の「訴訟でケリをつけるしかない」という最悪の事態とは正反対の、なるほどこれがあるべき姿だ、と思える結末に向かっていくので、それに注目！それが本作の本筋の結末だが、本作はそれとは別に、もう2つの結末も明確に

示されるので、それにも注目したい。

第2の結末は、自動車教習所の教官という日々の仕事をこなしながらファインの奮闘をずっと支えているにもかかわらず、教え子の女性ワン（レネ・リウ）（劉若英）との“浮気”をフィンから疑われていたシアオピンの疑いが晴れると共に、再びシアオピンとフィン間の夫婦の愛を確認するもの。ファインの父親の故郷へ家族3人で赴いた時の車は古い型の赤色のクーペだったが、フィンが無事定年退職した今、シアオピンがピカピカの白の新車に乗っているのは一体なぜ？かつて、フィンは「将来は夫婦2人でゆっくり気ままにドライブしたい」と言っていたらしい。しかし、それを言っていた当人はそんなことを忘れてしまっていたが、ロマンチストで優しいシアオピンはそれをしっかり覚えていたわけだ。フィンは思わず「いくらしたの？」と現実的な質問をしていたが、そんなことは夫婦間の「相愛相親」にとってどうでもいいことだ。こんな形でシルヴィア・チャン監督が描く、夫婦間の“相愛相親”の第2の結末に注目！

そして第3の結末は、アダーとウェイウェイの恋の行方だ。ウェイウェイの愛情は確認できたものの、歌手になる夢をますます強くしているアダーとしてはこの町に留まるつもりはなく、あくまで北京に行つて挑戦するのは当然のこと。しかし、そうなればしばらくの間（長い間？）ウェイウェイと離れ離れになるのが現実だし、いつ「北京に來い」と言えるのかもわからない。そんな中、ついにアダーは北京に旅立つ決心を！すると、それを聞いたウェイウェイの決心は？そんな2人にみる、“相愛相親”の第3の結末にも、しっかり注目したい。

2018（平成30）年8月20日記